

# ISIS への戦争とメディアのウソ：プロパガンダの漫画的単 純さ

By Media Lens

Global Research, October 2, 2014



スコットランドの独立に関する国民投票キャンペーンは、“主流” ニュース・メディアのエリートびいきの偏見について、多くの人々の意識を高めた。この偏見を暴きこれに反対する社会メディアの草の根的力は、見ていて勇気を与えるものだった。しかしスコットランドの独立問題は、伝統的なメディアが一貫して体制権力を支持してきた中での一つに過ぎない。

企業メディアの振舞いの本質的な特徴は、エリート集団の利害が常に優先され保護され、一般大衆の深刻な反対意見は、矮小化され無視されてきたことである。BBC は、最大で断然、最も地球的に尊敬されている報道機関だが、これも例外どころの話ではない。実際、重要などんな問題についても、彼らの一貫して偏向したニュース報道は——深刻な皮肉は、彼らが絶えず利害を踏みにじっているその一般大衆によって、財政を支えられていることだ——BBCこそ、今日、確かに最もたちの悪いプロパガンダ機関であることを示している。

例えば、BBC の編集者やジャーナリストが、いかに一貫して、NATO を平和と安全保障を維持する組織として描いているかを考えてみよ。最近のウェールズでの NATO サミットの間、忠実なニュース・リーダーの Sophie Raworth は、「10 時の BBC ニュース」の視聴者にこう語った——

「NATO の指導者たちは、イラクやシリアのイスラム過激派の、増大する脅威にどう

立ち向かうか、次を取るべき手段を決定しなければならないでしょう」(2014/9/4)

その後わかってきたように、「次を取るべき手段」というのは、ほんの24年の間に西側がイラクで起こした3度目の戦争のことだった。

この同じ「10時のBBCニュース」は、何の疑念もなく、NATO議長アンダース・ラスムッセンに由来するイデオロギー的主張を、こう続けた――

「周囲を危機に取り囲まれた中であって、我々の同盟、我々の環大西洋共同体は、安全保障と安定と繁栄の島となっています。」

実を言えば、真理は、ほとんどラスムッセンの主張の真逆である。NATOこそ、世界の多くの部分を苦しめている、安全無保障、不安定、戦争、暴力の**根源**になっている。型通りに、BBCニュースは、このよく記録された真理を完全に避けている。当然、それは視聴者に対し、ラスムッセンがデンマーク首相だったときに、次のように言ったという都合の悪い事実はおくびにも出さなかった――

「イラクは大量破壊兵器をもっています。それは我々がそう思うということではなく、我々が知っていることなのです。」

これはずいぶん極まりの悪い話だった。しかしこの他にも省略されているのは、NATOサミットでの開会演説に対する批判的反応で、そこで話されたことは、軍事的な自尊と大言壮語に満ちたもので、もしこれが北朝鮮とか、イランとか、その他、国家の指定する“敵国”で起こったことであれば、ジャーナリストたちが大笑いする類のものだった。我々メディア・レンズは読者に訊ねてみたい。これを聞いて笑い崩れない人、あるいは終わりまで辛抱して聞いていられる人はいるだろうか？――

[https://www.youtube.com/watch?v=SnARRNAPLYU&feature=em-share\\_video\\_user](https://www.youtube.com/watch?v=SnARRNAPLYU&feature=em-share_video_user)

## “イスラムの脅威”という旗を気違いのように振る

数か月も前から、BBCニュースは、イラクとシリアの「イスラム国」の“脅威”について、ワシントンとロンドンから発せられた宣伝を忠実に報道している。ニュース・リーダーのHuw Edwardsが「10時のBBCニュース」で国民に真顔で話しかけたとき、彼はこの公的な原稿を忠実に読んでいた――

「私たちはイスラム国の脅威を封じ込めるための、いくつかの方策を見ることになるで

しょう」(2014/9/3)

BBC ニュースのマネージャーたちの、一般大衆にそっくり呑み込んでもらうべき前提は、「我々」文明化された西洋の者たちが「封じ込め」なければならない「脅威」があるということである。BBC ニュースは、米英の国家権力の定めたイデオロギーの道に従いながら、ロボットのように、自分たちの報道は「バランスの取れた」「不偏不党」のものだと主張している。

この BBC ニュースや、他の企業ニュース・メディアによって可能にされたプロパガンダ運動が、9月22-23日に始まったシリアでの“ISIS グループ標的”への米主導による爆撃を準備したのである。他の権力寄りの報道に歩調を合わせて、インデペンデント紙は、この不法な介入を、「ISIS 武装勢力を“弱め破壊する”と誓ったオバマ大統領によって認可された、拡大された軍事行動の一部としての空襲」であると説明した。

ガーディアン紙は、「アメリカとその同盟軍は、武装勢力に対してジェット機とミサイルを配備した」と報道した。「武装勢力」と「ISIS 標的」を強調することで、いつもの通り、無実の市民たちが被害を受けるという事実を隠している。実際、5人の子供を含む7人の市民が、北シリアの村への爆撃で死んでいる。

[http://www.democracynow.org/2014/9/29/after\\_civilian\\_deaths\\_human\\_rights\\_watch](http://www.democracynow.org/2014/9/29/after_civilian_deaths_human_rights_watch)

ガーディアンの報道は、高位のペンタゴン役人たち、ある匿名の“米官僚”、それにオバマ大統領が用いたレトリックに、大きく基づいている。長いガーディアン論説の最後に折り込まれているのは、この最近のアメリカによる侵略の不法性を問い糺す試みである——

「この戦争のシリアへの拡大は、明確な議会の承認を得たものではない。…オバマは、2001年の、アルカーイダに「軍事力を用いることの承認」が、十分な法的承認を与えていると主張するが、これを受け入れる法学者はほとんどいない…」

これは一つの非難逃れのジェスチャーであって、超大国が自ら決めた世界の警察としての役割において、アメリカが振るってきたもっと大きな暴力の、残忍な事実を隠すためのものである。もっと肝心なことは、アメリカの攻撃はシリア政府の承認を得ていないから、これは戦争犯罪にあたる。しかしそんな報道は、“主流メディア”のジャーナリストの思いも及ばぬことだ。

[http://medialens.org/index.php/alerts/alert\\_archive/2014/776-the-purpose-and.html](http://medialens.org/index.php/alerts/alert_archive/2014/776-the-purpose-and.html)

BBC 北米編集長としてワシントンに食い込んだ Jon Sopel は、「10時のBBCニュース」(2014/9/23)で、「アメリカは自分が必要とするきわめて重要な支持を得ている——すな

わち穏健なスンニ派国家の支持だ」と報道した。それはバーレーン、ヨルダン、サウディ・アラビア、アラブ首長国連邦、それにカタールのことだが、これらの国家はすべてアメリカの権力としっかり連携し、それに支えられている。しかも、特にサウディ・アラビアでは、圧政的で、拷問が盛んに行われる体制が布かれているのに、Sopel は「穏健な」という言葉を、信じられる範囲をはるかに超えて使っている。

一方、「中東での米主導によるイスラム国叩きキャンペーン」のプロパガンダの面を説明しようとする、ある BBC の論説において、BBC の“安全保障” 特派員 Frank Gardner は、こう書いている――

「イスラム国にとって、西側部隊が彼らと地上で戦闘することの、予想される利益は明らかだ。彼らはずいぶん至近距離で相手と戦う機会をもつことになり、それはあらゆるプロパガンダの効果を、西側の人々に与えることになるだろう。」

ガードナーの分析から見落とされているのは、例によって、もう一つの、中東における西側主導攻撃の「予想される利益」である。彼は、これまで長い間、アメリカがこの地域の天然資源を戦略的に支配する必要を感じていたことに、全く触れようとしなかった。またガードナーは、ホワイトハウス、ペンタゴン、それにダウニング街の、従順な西側メディアを通じてなされる、ニセ情報による大衆操作という「プロパガンダ効果」に言及することはなかった。再びいうが、これが通常のやり方である。もし誰か若い、野望をもつ BBC のジャーナリストが冒険好きの性格を發揮して、このやり方に、挑戦しないまでも、疑問を持つような素振りを見せるとしたら、彼あるいは彼女が“安全保障” 特派員に抜擢される見込みは、全くなくなるだろう。

9月27日、英下院が、イラクの“IS 標的” への英空軍の攻撃を承認する票決を行ったとき、三大政党のすべてが合意した。重大な反対意見はほとんど存在しなかった。それは“我々の” 揺れ動くが安定した西洋的政治の古来の特徴である。議員の圧倒的多数が、イラク爆撃に賛成した――524名（全議員の81%）、反対はわずか43名（7%）。

一般市民の間では、大掛かりな宣伝キャンペーンが功を奏して、たった6週間のうちに、爆撃支持を37%から57%に引き上げた。議員間での支持（81%）が選挙民のそれ（57%）よりもはるかに高いということは、またしても、議会“民主主義” が一般民衆の利害と意見の真の反映だという考えが、ウソであることを証明している。

オブザーバー紙が、不名誉にも、2003年のイラク侵攻を支持した時のように、この新聞は“正義を行う” という苦しいレトリックに託して、戦争支持の旗印を示した。イラクに英国

の爆弾を再び降らせることは、「正義と道徳にかなうこと」だった。この文句は“我々の自由な新聞”の注目すべき告発として、イギリス中の全国紙に反響した。インデペンデント紙のツイートは、こんな意見さえ載せた――

「中東に民主主義をもたらすことは、一夜にしてなされることでなく、何世代もかかるかもしれない。」

“左寄り”の新聞が、ある国家に爆弾を落とすことが“民主主義”の前提だと主張するとは、悲喜劇を通り越している。同様に、西洋は、中東諸国の本物の自決について憂慮しているのであって、歴史が明らかに示すように、その土地固有の発展の脅威を押しつぶして、西洋がその地域の豊かな資源を握り続ける意図などない、などと宣言するのは理性に対する挑戦である。

## 思いやりと誠実さと勇気のある我々の指導者たち

プロパガンダは必要であればいつでも盛んに行うことができ、現にそうしている。上に見たように、特に戦争のときはそうだ。しかしプロパガンダはまた、不快な真理から注意をそらすためにも用いられる。例えば、体制の枠組みの内部から報道は、パレスチナ人民を残酷に抑圧するイスラエルの犯罪行為に関する深刻な持続的なニュースを、確実に禁止する。

パレスチナ支持の英“リスペクト党”議員 **George Galloway** が、最近、イスラエル支持者による道路上での野蛮な攻撃を受けたとき、政治とメディアのエリートたちは、スクラムを組んで起こったことを非難するのを拒否した。かりに怒ったイスラム教徒が、イスラエル支持の議員を道路上で襲ったのだとしたら、どうなっただろうか？ 政治とメディア体制からの怒涛のような非難が起こったことだろう。Neil Clark は、ギャロウェイ攻撃に対する卑怯な主流メディアの沈黙を指摘して、こう言っている――

「これは、イギリスがどんな国になり下がったのか、いかに我々の民主主義と、対外政策問題について意見を述べる我々の自由が、腐食してしまったかについて、多くのことを物語っている。」

主導的な政治家がたえず自分について、思いやりがあり、ウソをつかず、勇気をもつ者というメディアのイメージを作ろうとするのは皮肉なことである。現実には、彼らは強力な事業や財政的利害につながっており、隊列を乱すことをひどく恐れている。特にイスラエルの批判となればなおさらだ。政治的“指導者”とは実質的に、ほとんど自律性をもたない操り人形であり、一般大衆をできるだけ受動的で無力な状態にしておくという、エリートを利用する

役割に縛り付けられている。企業メディアがここで重要な役割を果たす。イギリスの歴史家で外交政策アナリストの Mark Curtis はこう言っている――

「BBC や商業テレビのニュースが、正直な国家プロパガンダ機関に似たやり方で、イギリスの外交政策について報道している証拠は圧倒的である。彼らは国家の指令を受けているのでは決してないが、彼らの報道はそう言ってもいいようなものだ。それは“微妙”でさえない。BBC、ITV、それにチャンネル5のニュースは、イギリスの外交政策について深刻で重大なことは、全く何も報道しない。例外は、チャンネル4ニュースの風変わりな報道である。テレビニュース――ほとんどの人々の情報源――は、[外交政策報道について]メディアの最も極端なニセ情報を提供しており、新聞よりも大きなイデオロギー的機能を果たしている」(Mark Curtis, “Web of Deceit: Britain’s Real Role in the World”, Vintage, London, 2003)

かつてバグダッドのロイター通信主任だった Andrew McGregor Marshall は、最近こう語っている――

「西側のメディアには、こうした国々への自分自身の介入について、実はそれが明らかに、一方的な、完全に国家主義的な、利己的な見方であるにもかかわらず、これが中立的で偏見のない見方だと主張する傾向がある。」

更に続けて――

「もしあなたが米軍の残虐行為を告発しようと思うなら、あなたはそのストーリーのあらゆる隅々までが、絶対に正確であるようにしなければならない。なぜなら 1 つでもそこに間違いがあると、あなたは悪口を言われ、職を失うかもしれないからだ。最近数年で、そのようなこと何人かに起こっている。しかしもしあなたが、イエメンやアフガニスタンやイラクの何らかの武装集団が、残虐行為を働いたと言おうと思うなら、あなたのストーリーは完全に間違っているにもかかわらず、誰もあなたの悪口を言わず、またそれが本当かを確認する者もない。」

オランダのジャーナリスト Karel Van Wolferen は、最近、一般大衆を広く無知と受動性の状態におくのにひどく都合の悪い、国家 - 企業プロパガンダを暴く、洞察力ある論文を発表した。<http://www.unz.com/article/the-insidious-power-of-propaganda> いわゆる“自由世界”において、この「たちの悪いプロパガンダ」の効果を研究するのに、「今以上の好機はない」と彼は言った。続けてこう言っている――

「プロパガンダを効果的なものにするのは、それがその“行間の存在”を通じて、暗黙の知識として頭脳に入ってくるやり方である。物事についての我々の暗黙の理解は、定義から言って、焦点をもたない漠然としたものである。それは我々が他のことを理解するのに役立つ。それが要求する前提はすでに決まっていて、もはや議論によって左右されることはない。」

このプロパガンダの多くは、権力の中心、とりわけワシントンやロンドンから発して、  
「BBC やヨーロッパの主流メディアの大多数のような機関によって、忠実に従われ続ける」。このようにして BBC ニュースは、無際限に西洋的“価値”を宣伝し、議会“民主主義”が、許容される公的意見と理性的言説の幅を代表するものと、当然のように考えている。このエリートを支持する報道の枠組みを下から支えているものは、Van Wolferen が“大西洋主義”(Atlanticism) と呼ぶ、信念に基づくイデオロギーである。この信念とは――

「もしアメリカが世界の第一の政治的主導者として受け入れられず、ヨーロッパがアメリカ方式に従わなければ、世界はうまく立ち行かない」

というもので、その結果――

「プロパガンダはすべてを、“良い者”と“悪者”という漫画的な単純さに還元してしまう。」

我々のメディアに対する警鐘として何度も注意したように、この「漫画的単純さ」の大きな特徴は、“我々の”政府は善意の動機をもって、彼らの全体的な関心は一般民衆を安全で保護された状態に保つ、ということである。悲しいことに、この“欺瞞の網目”の背後にある真実は、あまり気持ちのよいものではない。

DC